



2022年5月16日放送

## 「第85回日本皮膚科学会 東部支部学術大会 ①

### 会長講演より 「The future is here」

札幌医科大学 皮膚科  
教授 宇原 久

#### はじめに

第85回日本皮膚科学会東部支部学術大会を2021年9月18日から19日にかけて札幌で開催いたしました。テーマはThe future is hereとしました。皮膚科の近未来を語りたいたと思いました。

まず札幌医大と東部支部学会との関係について振り返りました。札幌医大皮膚科としては、これまで第35回（1971年）久木田淳初代教授、第43回神村瑞夫教授、第56回高橋誠教授、第65回神保孝一教授、第76回山下利春教授が主催しております。今回は久木田淳教授の第35回からちょうど50年目の開催になりました。

私は北大を卒業後に信州大学で研修を始めました。3年目に国立がんセンターの病理部と皮膚科で研修しました。当時のボスは日本の皮膚癌診療の創成期を担った石原和之先生でした。多くの弟子を育て上げ、皮膚腫瘍学に多大な貢献をされました。残念ながら今回の学会の直前にご逝去されました。急遽学会場にご遺影を用意し、私を含めた弟子たちでご冥福をお祈りしました。

国立がんセンターから信州大学に戻ってからは斎田俊明教授のもとで多くの臨床研究に携わりました。2011年頃からは主にメラノーマの新薬の治験に関わるようになりました。多くの方の協力を得て、ニボルマブ、イピリムマブ、ペムブロリズマブ、アベルマブなどの免疫チェックポイント阻害薬やベムラフェニブ、ダブラフェニブ、エンコラフェニブ、トラメチニブ、



ビニメチニブなどの BRAF/MEK 阻害薬、そして腫瘍溶解性ウイルスなどです。ダカルバジンなどの殺細胞性抗がん剤しかなかった時代から、大きな進化を遂げた皮膚がんの薬物療法の転換期に関わられたことをとても幸せだと思っています。数十年間皮膚がんと戦ってきた先輩の先生方の努力の積み重ねがあってこそのことだと感謝しております。

さて、私は 2017 年に札幌医大に呼んでいただきました。赴任後も、優秀なスタッフに支えられてきました。アレルギーと炎症性皮膚疾患についてはアレルギー学会の指導医である澄川靖之先生や菅裕司先生、熊谷綾子先生が中心となって診療と研究を担ってくれています。遺伝性疾患の専門外来や皮膚がんの分子生物学的研究は臨床遺伝の専門家である肥田時征先生が中心となって支えてくれています。肥田先生は本会の事務局長を務めてくれました。臨床病理学やダーモスコピーについては神谷崇文先生が、手術や薬物療法については皮膚悪性腫瘍学会指導専門医である加藤潤史先生を中心に、堀本浩平先生、佐藤さゆり先生を中心とした腫瘍チームで、多くの症例の治療と治験と研究を担当してくれています。大学院生も腫瘍と炎症領域で研究を進めてくれており、佐藤さゆり先生はメラノーマのバイオマーカーの仕事で、小林景樹先生は掌蹠膿疱症と喫煙との関係を調べて学位を取得したところです。

## リキッドバイオプシー

次に、現在私自身がかもっとも興味をもっているリキッドバイオプシーについて紹介します。

一昨年にメラノーマに特化した 95 種類の遺伝子を搭載したパネルを作成しました。このパネルは 2020 年 4 月時点までにメラノーマで報告されている遺伝子をほぼすべて網羅しています。ホルマリン固定された手術標本の薄切標本と頬の粘膜から擦過して採取した細胞があれば解析可能で、費用も数万円と低額です。現在症例数を増やして本邦人におけるメラノーマで観察される変異遺伝子の特徴を解析しています。この解析結果は治療薬の選択につながる可能性があります。現在さらに目指しているのはこの患者ごとに異なった遺伝子変異情報を末梢血サンプルを用いた病勢判断のためのリキッドバイオプシーに利用するというアイデアです。信州大学在籍中から主に BRAF 変異のある症例については血液サンプルからの変異 BRAF の検出を行ってきました。しかし、腫瘍細胞由来の DNA 量は微量であり、かなり進行しないと検出は困難です。患者さんの腫瘍組織からは複数の変異遺伝子が検出できる場合があります。1 種類の遺伝子を追っかけるより、複数の遺伝子を追っかけたほうが検出感度が上がる可能性があります。すでに大腸がんなどの領域ではコモーション化されています。

患者ごとに腫瘍の遺伝子異常がわかれば、まずは治療薬の選択につながります。腫瘍細胞の遺伝情報を用いた治療薬の個別化、テーラーメイド化はすでに始まっています。さらに、検査についても個別化していくべきだと考えています。

一方、本邦人に多い掌蹠や粘膜型は点突然変異例が少なく、もっと長い塩基列の脱落や

増幅、融合遺伝子など、異常の種類が多彩です。

我々の開発した遺伝子パネル検査で変異が見つからない症例については、次の段階として融合遺伝子を検索する、というステップを稼働させています。

### 学会を振り返って

さて、今回の学会について簡単に振り返ります。招待講演、シンポジウム、教育講演は、私自身が今最も話を聞きたいと思う先生方をお願いしました。学会には200名の現地参加を含め、950名の方にご参加いただきました。

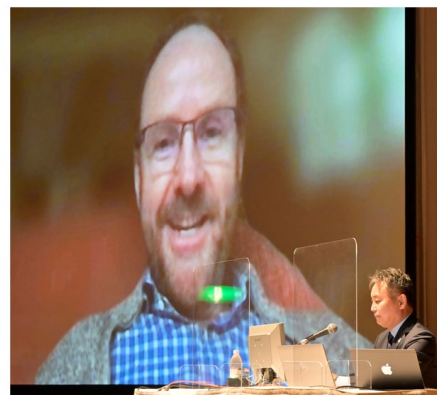
まず、招待講演1はUCSFのBastian教授にメラノーマの遺伝子異常の最新情報、とくにメラノサイトからメラノーマ細胞が発生する段階の異常についてご講演いただきました。メラノーマの遺伝子異常は多彩であり、発生機序も多岐にわたることが確認されました。招待講演2は、私が以前からファンだったRaynolds教授にプレゼンテーションの極意を伝授いただきました。シンプルさの重要性を再認識しました。招待講演3は本学の松村博文教授にホモサピエンスの東アジアへの移動についてお話しいただきました。わくわくする内容でした。

シンポジウムと教育講演は、薬疹、感染症、食物アレルギー、遺伝カウンセリング、母斑という用語の妥当性、行動経済学と医療、好中球、在宅医療の実際、薬剤が効きにくい掌蹠、粘膜型メラノーマに対する治療戦略、炎症性疾患に焦点をあてたダーモスコピー、皮膚外科（基礎編）を取り上げました。

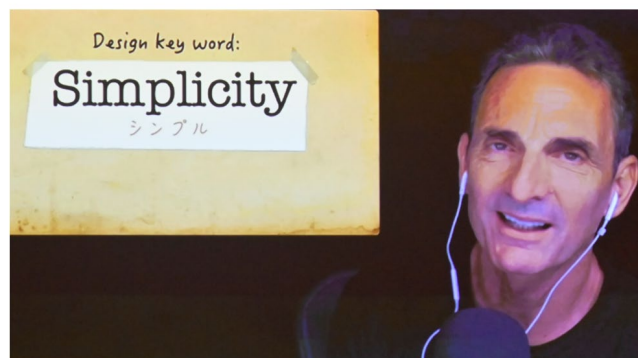
すべてのテーマが視聴者のためになったと確信しています。ご講演された先生方と座長の先生方に対して感謝の気持ちでいっぱいです。

学会の準備を始めた1年半前にコロナウイルス感染が蔓延し始め、それでも1年経てばある程度落ち着くであろうと思っていました。しかし状況はさらに悪化してしまいました。そんなことを見越して考えた案ではありませんでしたが、大好きな木村弓さんのコンサートを企画しました。学会直前に札幌にお越しいただけることが決まり、気持ちがだい

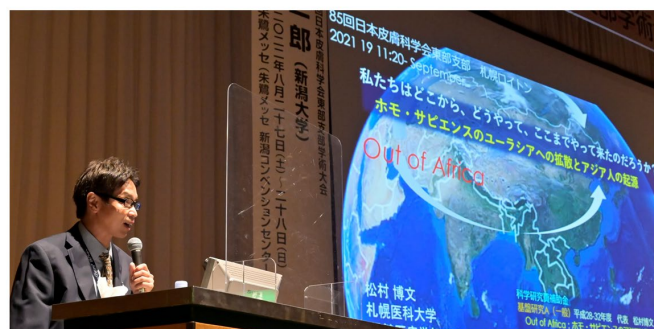
### 招待講演 1 Bastian先生



### 招待講演 2 Raynolds先生



### 招待講演 3 松村博文先生



ぶ明るくなりました。歌声と豎琴は心にしみました。多くの先生方はWEBでの視聴になってしまいましたが、ある先生からPCのモニター前にお子さんをお呼びし、一緒に楽しんだとお聞きし、とてもうれしく思いました。また、札幌医大皮膚科教室員と同門会の先生が中心となって弦楽アンサンブルを披露しました。私もちょっとだけ出ましたが、とても良い思い出になりました。

youtubeのQRコード

デルマトアンサンブル



## おわりに

本学会では座長、演者の先生方、日本臨床皮膚科医会、札幌皮膚科医会、札幌医大、同門会、並びにたくさんのメーカーの方々から多大なご支援をいただきました。また、学会というものを初めて主催しましたが、自分自身が楽しめたのは、日本皮膚科学会の学会担当の皆様のご支援によります。厚くお礼申し上げます。心残りがあるとするば、札幌でおいしい食事とお酒をお越しいただいた方々と楽しめたかった、という一点のみです。この楽しみは遠くない未来に是非実現したいと思っています。ありがとうございました。

